小長谷有紀氏教授の著作『人類学者は草原に育つ』の出版に寄せて

マンドフ（中央民族大学名誉教授）

１. 小長谷有紀氏と知り合った契機

小長谷有紀氏と知り合ってちょうど 30 年になる。1988 年、はじめて内モンゴル社会科学院へ留学する時、北京を経由した。その時、妻のハスチムグが空港から迎えたのである。家でお茶をしたり、研究について話しをしたりした。当時、彼女はまだ利光有紀という娘だった。当時から連絡を取り合って、彼女から書籍や贈り物を受け取ったことも、国際会議などでともに参加したこともある。当時は彼女の名前を利光有紀と記憶した。後に再会するときには小長谷有紀になっていた。彼女は結婚して夫の姓になったとのことだった。小長谷有紀という名前の発音を教えてもらったが覚えられなかった。そのために、面白いことが起きたのである。エルデムト教授から「5 月 1 日に、日本の学者小長谷有紀教授の著作の出版記念討論会を行うため、出席して話をしていただけないか」と言われて、非常に驚き「小長谷有紀とは何の学者だったか、知らない人については何も話せないだろう」と答えた。ところが、古い知り合いだったのである。

２. 著者小長谷有紀氏に対する印象

小長谷有紀氏が私に与えた最も深い印象は２つある。最初の印象は、やはり彼女は勇気ある若い娘であった。女子１人で、モンゴル語を勉強し、モンゴル文化を研究するために海を渡り、中国、モンゴル、ロシアの多くの地域を訪れている。異国異文化のなかで言語、飲食、習慣、法律などすべてが不慣れな状況でどのぐらい難しいかはいうまでもない。小長谷有紀氏本人の話や記述からも彼女が経験した困難がわかる。一つだけ例を言う、ウランバートルを密かに離れ禁止地へ入って捕まって取り調べられたことがある。しかし彼女は勇気をもって巧みに困難を乗り越えていった。小長谷有紀氏のこのモンゴル文化研究のため一心で努力した精神が貴重であり、そのために時間と知恵を注いできたのである。一人の日本人が他民族の文化を研究するため全身で頑張るその精神は、毛主席の話を引用するなら、インターナショナル精神である。小長谷有紀氏はモンゴル研究にすべてを捧げたインターナショナリストである。彼女のモンゴル研究への精神を我々は見習うべきであり、そのような精神でモンゴル文化を伝承していくべきである。

３. 著作に関する感想

本著について話す前に、もう一冊のサランゲレルと共同で研究した著作『オーラルヒストリー：エジネーに生きる母たちの生涯』について少し触れたい。そこには、17、18 人の母にインタビューして、彼女たちの異なる人生経験を記述することで、当時の社会、経済、政治状況が反映されている。その著作を、私は「モンゴル口承史研究の鏑矢である」と評価したい。

今日の対象である『人類学者は草原に育つ』は幅広い内容を含めている。本を構成する 60 節の内容から見ると、旅行記、学術的散文詩や論文、調査報告などであるが、その内容はモンゴルの言語と文化に集中している。モンゴルの社会、政治、歴史、文化に関する貴重な情報を提供している優れたモンゴルに関する調査報告である。人類学、民族学、社会学、歴史学といった分野を含めており、方法論も実用的である。記述の方法も自由でわかりやすい。スケッチや写真などを加えて臨場感を与えている。

中央民族大学モンゴル言語文学専攻が出版記念討論会を組織し、北京、内モンゴル、モンゴル国の学者たちが集まっている。これは、小長谷有紀教授のモンゴル研究への貢献を顕彰すると同時に、モンゴル研究をより良い未来へつなげようという決意でもある。

2018 年 4 月 25 日

フィールドワークの悦楽、困難、方法
―小長谷有紀著『人類学者は草原に育つ』の感銘―

チョクト（中央民族大学教授）

小長谷有紀教授は、2007 年にモンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）、2013 年に紫綬褒章を受賞した著名なモンゴル学者である。小長谷有紀は 1957 年に大阪市で生まれ、京都大学で博士課程を満期修了した。人間文化研究機構理事、国立民族学博物館の併任教授であり、遊牧文化論、モンゴル研究を専攻する。1979 年にモンゴルへ留学して以来優れた研究を続けて今日に至る。

2018 年に、小長谷教授の 2014 に出版された著作『人類学者は草原に育つ』が日本語からモンゴル語へ翻訳されて(中央民族大学博士課程 2015 期のジャライル・テンヘーによる翻訳)内モンゴル文化出版社から刊行された。ここで筆者の読後感をまとめて述べることにする。

小長谷有紀教授の著作は「まえがき」「あとがき」「参考文献」「特別付録　自筆フィールドノート」「翻訳者の添付―蒙日語の部分照合表」など以外に 6 章の内容からなる。第１章は「はじめてモンゴル――一九七九年、モンゴル人民共和国へ留学」、第２章「始めてのフィールドワーク――一九八八年、中国内モンゴルでの研修」、第３章「暴走モンゴル――一九九五年から九七年、モンゴル、ロシアを踏査」、第４章「博物館の収集活動―中国とモンゴル国」、第５章「ＮＰＯ活動のはじまり―二〇〇一年、雪害以後」、第６章「アーカイブズというフィールド―二〇一〇」という 6 章において、革新しているモンゴルでの様々なことを経験者として詳細に、事実に沿って、深い愛情を持って描き出し、フィールド過程における悦楽、困難と方法を惜しまなく書いている。これらの点を以下において個別に見て行きたい。

１. フィールドワークの悦楽

フィールドワークには様々な楽しみと感動が伴っており、これが往々に学者たちを成功へと導く。小長谷教授もモンゴルで調査を行なう過程で多くの喜びを味わって来た。ここでは具体的な事例を取り上げてみることにする。

１−１. 深い愛情から生まれる喜び

「老夫婦の写真」では、1988 年にシリンホトの郊外にあるバヤンノールという地で 2 人の老人と知り合ったが 2013 年に再び訪問するとき、すでに他界していた。彼らの息子ウネルバヤンが仏壇においてあった数珠を筆者に渡し、「『姉さんが来るのを待っていて』と言う。姉さんというのは私のことである。形見分けであった。それは母が肌身離さず持っていた数珠であり、一仕事終わればいつも何気なく、操っていた数珠であった。ぼんやりと思い出す。母はそれを兄の形見だと言っていた。いまならよくわかる。兄がラマ僧だったこともあって彼らは難を避けてきた。『仏のいる土地へ行こう』と母の家族が決意をしたのも、ラマ僧になった息子が革命政権によって逮捕されたり、殺されたりしないようにという想いがあったにちがいない。その大切な兄の形見を母は私に残してくれたのだった」(『人類学者は草原に育つ』: 45)。涙を誘う物語で、小長谷教授の老人たちへの思いを十分読み取った。これがフィールドの喜びではないだろうか。

１−２. 仕事の成果から生まれる達成感

「衣服一式の収集」という節では、「大モンゴル展」のため一式服を集めた過程を詳しく述べている。「(民族衣装たちは) 特別展『大モンゴル展』では大活躍した。衣装の大半は、来場者自由に着て、さらに展示場内を歩けるようにしてあった。だから、展示場には各種モンゴル衣装を身につけた『にわかモンゴル人』が大勢、闊歩していた。来場者がニコニコしながら観ているのを見るのはとてもうれしいことだった。収集の苦労はそのときふっとんでしまったらしく、もはや思い出せない」(同上:126)と仕事の成果が与える喜びを述べる。「大モンゴル展」の「ゲルをまるごと買った」では「『大モンゴル展』を三ヶ月のあいだに十万人来場者を迎えた。おかげさまで一日平均千人という好成績をおさめた」(同上:143)と展示の具体的な数値で仕事から得られた達成感を表す。

また展示を見た小学２年生の「たくさんの　花咲く文化　満開だ　一生枯れない　人類の恵み」(同上：150) という詩を以って筆者の喜びを伝える。

１−３. インタビューの楽しみ

「時代の条件を十分に利用する」という部分では、ライフヒストリーを聞き取る過程での楽しみを表現している。そこで「ミンジュールさんは 1914 年生まれで、ダムディンさんは 1929 年生まれであるから、彼らは劇的な変化を体験している。はじめてのパン、はじめてのジャガイモ、はじめてのトマト、はじめての鉄道、はじめてのシャワーなどなど。人生がはじめて尽くしなのだ。そのときの出会いの気持ちを言葉にして伝えてくれるから、聞く方は楽しくて仕方なかった」(同上：140) と述べ、続いて「ちょっと笑わせるにとどまらず、ずっと笑わせながら、モンゴルの 20 世紀をかいまみせてくださった」とインタビューの楽しさを描く。

１−４. 新しい発見が与える興奮

「半世紀前の写真−デジタル化の威力」では筆者が行なった、梅棹忠夫のフィールド資料から 100 枚の写真(和崎洋一が梅棹に寄託した)をデジタル化する作業を述べている。そこで「デジタル化の威力は想像以上のものだった。そもそもフィルムは残っておらず、紙に焼き付けられたそれらの写真は 3 センチ×4 センチ程度で、小さすぎて細部まではわからない。拡大コピーをしても画像が粗くなってわからない。虫眼鏡で見てもわからない。それらをデジタル撮影して資料化したことによって、いままで見えなかったことが見えてきた」(同上：190) と書いている。筆者の記述から写真のデジタルによって見えなかったことが見えてくる興奮が看取される。また例えば、「つばの広いハットをかぶった人が今西と梅棹と大きく写っていて。誰かわからない、とりあえずモンゴル人だなあと思っていたら、なんとそれが中尾佐助であった」と『栽培植物と農耕の起源』(岩波書店 1966)の著者である植物学者を判明したことを記述し、その中での楽しみが伝わる。

以上において小長谷有紀教授の『人類学者は草原に育つ』から見て取れたフィールドの悦楽を４つに分けて見た。実際は本書ではフィールドワークの楽しさを表すところが多々あり、フィールドワークを通じて研究テーマを見つけ、目標を立てた喜びをも読み取ることができる。彼女は「草原における漢人の研究はこれからの重要な研究テーマになるだろう」(同上：201)とし、また「実践的研究者というのは必ずしも実用的な研究をする人のことではない。基礎的な研究をして、そこからの知見に基づいて現実社会と多面的なつながりを展開できる人を言う。私自身が、これまでずっとめざしてきたところであり、そしてこれからもずっと、めざすところである」(同上：205)と決心を示す。これもまたフィールドワー

クの楽しみではないだろうか。

２. フィールドワークの困難

すべての仕事には困難があるようにフィールドワークにも例外なく様々な阻害がある。小長谷教授は『人類学者は草原に育つ』において、フィールドワークの中で遭遇した困難を詳細に記述しているだけでなく、それらをどのように乗り越えたかをも述べている。それは若手研究者の研究や調査において参考となることは言うまでもない。

２−１. 資金調達の困難

「資金調達」では、調査費申請について細かく書いてあり、それを獲得するための努力をも記述している。そこで「申請書はもちろん内容で勝負するものであり、書類がきれいであるかどうかは二の次である。あくまでも応募される研究案のオリジナリティこそが主たる審査対象となる。ただし、どんなに独創的な研究であっても、あまりに読みづらいような書類では審査にとって不利であることはまちがいない。だから、きれいに書類を作成することは意外に大切なことである。いまでは、デジタル申請になったので、さらに競争水準は上昇していると言えよう。1990 年代はまだデジタル申請ではなかったので、手作業の範囲内で、きれいに手書きする、タイプライターを用いる、ワープロで印刷したものを貼付けるなど、それぞれに工夫を凝らしたものだった。そして最後に指定された箇所に指定された色を色鉛筆で塗って提出していた」(同上：81-82)と研究資金を得るためのプロセスと努力を詳細に述べた。「アルタイ・天山山脈における遊牧の歴史の歴史民族学的研究」の目的を「アルタイ・天山山脈地域は、遊牧民族史のなかで重要な位置をしめている。アルタイ山脈は古代トルコ族(突厥)が勢力をつちかい、天山山脈はトルコ系のウイグル族が王国をきずいた地域である。アルタイ山脈、天山山脈には、古代からここを舞台に活動してきた遊牧民ののこした遺物、遺跡が無数にのこされている。これらの大部分はほとんど未調査のままの状態といえる。古代以来のこされてきた遊牧民族の足跡を歴史民族学的な視点からとりあつかうのは、はじめてのこころみといえる。この点で、学界に寄与するところ大なるものがあるだろう。現在でも、アルタイ・天山山脈地域は、カザフ族をはじめとする遊牧民族の重要な生活の場となっている。本研究においては、遊牧生活の現状を民族学的に把握することも主要な目的のひとつとなる。この地域の遊牧研究は、ほとんど空白にちかい。本研究によってこの空白部の埋められることが期待される」(同上：82-83)と挙げた。以上に取り上げた事例から小長谷有紀と松原正毅等日本の研究者は如何に申請書を書き、研究資金を申請していたかを覗ける。これは若手研究者の研究費申請に当たって非常にいいヒントを与えるのではないと思う。小長谷有紀教授はこのような困難に真剣に向き合い、洗練した研究計画を作り上げたことで順調に研究を進めたことがわかる。

２−２．フィールドワークの過程における疲労

「素朴な動機」では「何しろ道はほとんど舗装されていない。橋はほとんどかかっていない。全行程のおよそ九割がオフロードであった。また、モンゴル語で『ジャラン・ユス』と呼ばれている旧ソ連製のジープはサスペンションが悪い。悪いというよりもほとんど無いかのごとく、大地から車体が受ける衝撃を、私たちは車体と共有しなければならない。車の中でしっかりつかまっていなければならないから、けっこう筋肉を使う。しっかりつかまっていても車内を飛び跳ねてしまい、あちこち当たって痛い。

行きたくて乗っているだから、精神的には辛くなくても、肉体的には辛い。加えて私は当時、腰痛持ちだったので、本当に意識が朦朧としてくることもあった」(同上:90-91)とジープで移動した経験を語る。しかし不思議なことに筆者は、このような調査を三年連続で毎年一か月間おこなっており、毎年平均6000㎞の旅である。このような困難に満ちたフィールドを続けられた原因を「やっぱり、どんなに苦しくてもついて行って、あちこち見ておきたいという素朴な動機があったとしか言いようがない」(同上:92)とまとめた。

２−３．ヨモギ・アレルギーの苦しみ

「南シベリヤからモンゴルへ」では、フィールド中に宿営地を選んだことを「最終的に場所を決定する権利は私がもっていた。というのも、私にはヨモギのアレルギーがあり、モンゴル語でシャリルジ(学名は *Artemisia macrocephala*)と呼ばれる草が生えていると、数百メートル」先から鼻水と涙が止まらなくなる。ましてやそんななかでテントを張ろうものなら、鼻血が出るほど反応してしまう。だから、風がよけられて、川から水を汲みやすい場所でも、生えている草で宿営地を変えるのであった」(同上:100)と記述した。小長谷教授は、ヨモギのアレルギーに戦いながら、一方でその恩恵をも受けたという。「モンゴルにおける農業開発史」(国立民族学博物館研究報告三十五巻一号、二〇一〇)という論文の完成はまさにそうである。筆者は「このヨモギは耕作放棄地にとくに多かった。というよりも、旧国営農場に近づくと鼻水がちろちろと出てくるので、私の鼻は耕作放棄地の検出器のようなものだった。モンゴル高原における遊牧の持続可能性を証明するうえで、植物生態学のような理科系の学問の場合は、実験場を用意してバイオマスを計測するといった直接有効そうな方法論をもっているのに対して、歴史学や人類学のような人文系の場合は、むかしからずっと遊牧でしたと言えば言うほど、開発推進派からノスタルジーに過ぎないと批判されがちである。いっそのこと逆に、農耕だとそんなに長続きしませんとか、牧畜を定着化させると長続きしませんとか、逆証明をしたほうがいいのではないか」(同上:100)と考え、自らフィールドのデータと自身のアレルギー経験に基づいてモンゴルの遊牧について逆証明を試みたのである。小長谷教授に困難に向き合える勇気とヨモギ・アレルギーに対処する措置がなかったら『モンゴル国営農場資料集』などが世に出されることはなかっただろう。

２−４．泥棒の被害

「テント一式を購入」では「大モンゴル展」特別展示に使用する展示物をモンゴルで収集する過程で遭遇した困難を語っている。例えば、収集品についてみんぱく特製のカードに記入する。そこで「そうこうするうちに雪が降り出した。手がかじかんでペンが持てない。革製のジャンバーを借り、毛糸のマフラーと手袋を借り、全身に防寒対策をほどこして作業を続けた。翌日、まだ足りないと思われるものをザハとよばれる市場に出かけて購入した。そして、このとき、スリに遭った！」(同上:120)と述べた。スリに遭ったことを詳細に「私は収集のために自分のお金ではない大金を所持していたので、用心深く、みすぼらしい格好をしておいた。いかにもお金を持っていそうな日本人ではなく、いかにもお金を持っていなさそうな日本人をつくろった。財布はもたず、札束はチャックのついたビニール袋に入れている。一見して現金だとわからないように。しかも、それは小さなカバンに入れてあり、カバンは身体の前に持つ。だから、私から現金を奪うのはかなり難しいだろうと思う。スリに遭ったのは私ではなく、スレンさんである。身長は180センチメートル、体重は100キロ近くという巨漢であっても、スリにはかな

わない。まったく気づかないうちに、肩に掛けてあったカバンのマチの部分がナイフで切り裂かれていた。財布だけが抜き取られていた。スリが横行していた時代だった」(同上：121)と語った。

ここまで見て来たように、筆者はフィールドワークを実行するなかで数多くの困難を自らの知恵と根性で乗り越えて来たことを、多くの事例から見て取れる。また例えば、「大モンゴル展」で「展示の中心に据えるために、突厥碑文のレプリカを作成したが、これについても、モンゴル国に許可を求めるとともに民間財団へ助成金を申請し、まず修復作業を行い、次に型取りをおこない、最後に色調整のために再訪する、というように数年がかり取り組んだ」(同上：180)というように力入れたとしたら、ウメサオタダオ展のためには、通常の６倍のスピードで仕事をしなければならなかった。要するに、本書の隅々から小長谷有紀教授の困難に立ち向かう精神と方法を読み取れる。

３．フィールドワークの方法論

フィールドワークにおいて方法論が非常に重要である。どのような方法を用いるかは研究のテーマと内容によって決められる。『人類学者は草原に育つ』ではいくつかのフィールドワークの方法論が言及されており、若手には参考になる点が多い。

３−１．ステイ型のフィールドワークとサーベイ型のフィールドワーク

本著の「まえがき」ではフィールドワークを二種に分けて、「一カ所にとどまるステイ型のフィールドワークもあれば、走り抜けていくようなサーベイ型のフィールドワークもある。そもそも、フィールドワークは多様なものなのだ」(同上：6)と述べて、「素朴な動機」ではそれを詳しく説明している。「一つはじっくり滞在し、ゆっくり生活をともにする滞在型ノフィールドワークであり、もう一つはざっくりと通過し、しっかり観察する踏査型のフィールドワークである。それぞれをステイ型とサーベイ型と呼んでおこう。一般に人類学的現地調査とは、前者を指しており、またの名を参与観察ともいう。家族の一員として生活をともにし、わが身を研究対象の外におかずに、参加しながら観察するのである」(同上：91)小長谷有紀教授が 1988 年にシンリンホト市郊外のバンノールで「ステイ型のフィールドワーク」をおこなったことは前述した。「南シベリヤからモンゴルへ」において、「ステイ型と違って、サーベイ型にとっては些細な彼らの訪問も貴重な人びととの出会いの場である」（同上：104)と「サーベイ型フィールドワーク」について言及し、二つの方法をできるだけ合わせることに心掛けていたことを説明する。

３−２．複数の方法を併用する試み

「モンゴル人の同定」という節では写真のデジタル化でおさめた成果を紹介している。そこで「こうして、三枚の写真それぞれに写っていた三つの家族について、どこのだれかがわかったのである。最初にぼんやり写真を眺めていただけから比べると雲泥の差がある。和崎のスケッチ、今西のノート、そして、梅棹のインデックス・ノートなどを組み合わせることによって同定が可能となったわけである」(同上：194)と方法と成果を述べている。また「もちろん、名前がわかったからと言って、モンゴル研究が一気にすすむなどということはない。けれども、これらの資料を学術的に利用して社会構造の変化などを分析する際に感じられるリアリティがまったく違うだろうと思う。そして何よりも、こんなふうにあれやこれやと資料を照合していく作業はまるでパズルを解いているようで楽しい。それはフィールドワークにおいて、あちらで見たことと、こちらで聞いたことが応答し、連関し、『わかってゆく』というプ

ロセスと少し似ている」(同上：194)とフィールドワークを通じて自ら見た、聞いたことが 1940 年代に撮影された写真と照合して、謎だった事柄が解明される喜びを伝える。

３−３．群れ追い説、子おとり説、子捕捉説に関する新説

「春でなければならない理由」、「『起源論』への寄与」「搾乳儀礼の研究へ」「去勢畜文化の研究へ」という 4 節では、遊牧における「群れ追い説」「子おとり説」「子捕捉説」を説明すると同時に自らの見解を述べている。「群れ追い説」「子おとり説」について「そもそもこの『子おとり説』は搾乳について議論するときに持ち出された考え方である。長い家畜化のプロセスを想定しておいたうえで、その過程で搾乳が発生するときには有効な考え方であろう。『群れ追い説』と『子おとり説』は、それぞれ群れに対するアプローチと、対個体的アプローチであるという点で、対比的である。と同時にもともと時間軸のうえで別の問題なのである」(同上：50)と主張した。また「この点を今西は、まだ家畜化もできてない段階で子どもをおとりになどできないだろうと、時間的矛盾を指摘し、否定する。しかし、家畜化のプロセスに長い時間軸を設定し、初期段階と後期段階に分けて配すれば、両者は決して矛盾することなく、共存もできるだろう。あるいはまた、『子おとり説』から、『おとり』という概念をとりのぞき、『子捕捉説』とすれば、子畜を捕捉して育てる家畜化という考え方になる。家畜化のプロセスについて、どれか一つだけが正しいと考える必要などなく、併用されることは十分にありうる。」(同上：50)と新しい観点を補足する。「それはともかく、梅棹の『子おとり説』は、モンゴルにおけるウマの搾乳方法から喚起されている。モンゴルでは、子ウマをつないでおくと、母ウマがどこにも行かない。まさに子ウマをおとりにして母ウマをキープし、搾乳する。ただし、梅棹はそれを書物で読んだだけで実際には見ていない」(同上：50)と梅棹の研究に欠如していた点を見出し、そこから着手して自らの研究を進めたのは評価に達する。

３−４．搾乳、去勢、屠畜－牧畜三大儀礼の理論

「牧畜三大儀礼の研究へ」という節では、モンゴル牧畜における三大儀礼に関する興味深い論点を提示した。しかしその論点はモンゴルだけにとどまらず、地中海地帯、アフリカなど地域における牧畜の状況を把握したうえで、それらをモンゴルの牧畜と比較してから独自の観点を出している。本著では「搾乳、去勢、屠畜」をモンゴル牧畜三大儀礼と定義し、それについて「家畜は人が管理している動物であるが、種付けは家畜の自由な性的活動にゆだねられてきた。産む家畜になったときに祝い、増殖するよう期待するが、それはあくまで期待にとどまる。生まれた子畜が少し大きくなったとき、オスの大半は増殖サイクルから切り離される。これにより、人が自由に利用しうる世界すなわち去勢畜文化が確立する。言い換えれば、それ以外の利用は自然界からの借用にとどまる。乳の利用はあくまでもメス畜からの拝借なのである。そしてさんざん拝借していた相手が死ぬと、再生を祈願する。増殖するよう期待するが、あくまでも期待にとどまる。そのような世界観のもとに統合されているのではないかと私は考えている」(同上：63-64)と述べた。これらの観点はフィールドワークのデータだけでなく、牧畜と関する口頭伝承などにも参照したからできたものである。この点はわれわれが見習うべき研究方法である。

小長谷有紀教授はうえに挙げた方法論のほかにもいくつかの問題点に触れている。例えば、「農耕より先に遊牧が始まったという説と、農耕はすでにあるけれども、その農耕から分離して遊牧が始まったという説とがある」(同上：54)について、「戦闘を職務とする遊牧集団の歴史的登場などを論じる歴史学者

たちは、当然、後者の説を支持する。遊牧と一口に言っても、何を議論するかを明確にしておかないと、議論はすれちがってしまうだろう」(同上：54)と説明した。まとめると、小長谷有紀教授のこれらの論点は彼女がおこなったフィールドワークと深く関連しており、現地調査で発見した問題を深めて一般化している。本著では紹介されている方法論は牧畜文化に関するフィールドワークに対して非常に実用的である。

うえの3章で小長谷有紀教授の著作『人類学者は草原に育つ』から読み取れたフィールドワーク悦楽、困難、方法をまとめた。本著ではまた一次資料の重要さや遊牧文化研究における問題点などにも言及している。それらについても紹介したかったが長くなったため割愛し、最後のまとめに入る。

まず、本著に反映されるフィールドワークの悦楽、困難、方法をそれぞれに挙げているが、実際のところこれらの要素が著作全体に、有機的結びつかれて浸透している。フィールドワークの過程で喜びを得ると同時に、その困難をわかり、著者が如何にして乗り越えて成果をあげたかをわかった。そのなかでフィールドワークの方法を参考できることはいうまでもない。

次に、小長谷有紀教授の著作を大学学部生にフィールドワークを教える際に教科書として使うことを勧めたい。われわれの大学生や若手研究者の間ではフィールドワークを重視しない傾向が見られる。見ている通り小長谷有紀教授がおさめた学術的功績はその長年のフィールドワークから得たテーマ、方法、資料と緊密に関係している。

もう一つに小長谷有紀教授の広い視野を言わなければならない。モンゴルの牧畜研究を地中海地帯、アフリカ大陸の牧畜文化を比較し、遊牧を論じる際に農耕や口頭伝承をも視野に入れている。小長谷教授はこのように広い視野をもって研究を進めて来たからこそ今日の成功をおさめることができた。

訳注

本訳稿では原著のページ数で示した。

小長谷有紀–草原に育った人類学者、草原の人類学者を育てる人類学者

ナサンバヤル（内モンゴル大学）

まず、メーデーの挨拶を差し上げたい。この祝日に我々の最も勤勉な人類学者小長谷有紀先生の著書『人類学者は草原に育つ』のモンゴル版出版記念討論会をしていることは適切であるように思われる。本著は小長谷有紀先生がモンゴル社会文化を研究してきた経歴を記述した自伝であるだけなく、モンゴル社会の変貌に自ら参加して来てモンゴルと深い絆を築いたことを十分に表している。本著は多様な意義を持っているのである。

１．著者が草原で人類学者として育つ過程を詳細記している。小長谷有紀は 1977 から大阪でモンゴル語を学習しはじめ、後にモンゴルへ留学する。また内モンゴルでフィールドを行ない、民主化のモンゴル国で調査や収集を進め、モンゴルの展示を組織した。近年は世界二次大戦以前に内モンゴルで調査した梅棹忠夫の仕事を続けた。これらの活動から小長谷先生の人類学者となったプロセスを見て取れる。

２．本著から小長谷先生は草原の人類学者を育てていることもわかる。1970-80 年代のモンゴル国や内モンゴルは今日と違って開放的ではなかった。社会政治システムがより厳しい状態であった。そのような特別な時代で人類学的研究を行なったことは独創的である。日本に限らず多くの外国人研究者がモンゴル、中国、ロシアに分布するモンゴルの社会文化に参与観察することは少なかった。わずか数人の１人が小長谷有紀先生である。彼女は草原の社会文化を人類学的に研究した先駆者であり草原の人類学者を育てた功臣でもある。本著では詳しく述べられてないが、実際、彼女は多くの若手人類学者を指導し、若手研究者の育成にも多大に貢献してきた。

３．本著では小長谷有紀先生の学術的活動だけでなく、彼女が積極的にモンゴル社会の変化に参加してきた経験をも述べている。モンゴルへ黒板を送り、内モンゴルの牧畜文化をモンゴル国へ紹介し、モンゴルが日本の核ゴミ捨て場にならないように活動したことなどが挙げられている。そのうち３番目の活動は、人類の運命にかかる核エネルギーの災害をモンゴル人に理解してもらうため、日本で募金を集めてモンゴルの大手新聞で宣伝した。そうしてモンゴルが日本の核ゴミ捨て場になることを阻止できた。そこで私は欧米人類学で言われる「応用人類学」を思い浮かべた。人類学者の多くは特定の民族や地域の社会文化を研究し、学術的成果をあげることで満足している。一方の応用人類学者は、対象地域の人々の運命、社会問題解決にも貢献する。小長谷有紀先生はモンゴルの教育、財政、生体安全などの問題解決にも関わり力を尽くしてきた。

以上のように、『人類学者は草原に育つ』は我々の草原で育った人類学者小長谷有紀の自伝にとどまらず、モンゴルとの関わりを通じて現地研究者の育成にも大きく貢献していることがわかる。

小長谷有紀の歴史学への貢献

周太平（内モンゴル大学教授）

皆さま、こんにちは。私は内モンゴル大学近代史研究所にいるウルゲダイ・タイヴンと申します。これまでのところ、小長谷有紀教授の『人類学者が草原に育つ』を中心に現在我々が直面している問題、即ちモンゴル文化を発展させ、深めていくためにはどうすればいいか、日本の学者から何を学べるべきであるかについて議論が集中している。

小長谷有紀氏の早期を言えば懐かしい。彼女がはじめて内モンゴルを訪れるとき迎えたのは私の叔父、ジュロンガである。当時の状況で叔父が彼女を残そうと懸命であったことは傍にいた私は見ていた。1987 年の冬、小長谷有紀が内モンゴルに来て様々な困難を乗り越えて勤勉していたことはフフホトの関係者たちがよく口にする。

ここで私は、これまでの議論の補足として小長谷有紀のもう 1 つの学術的貢献を述べようと思う。彼女は人類学的研究だけではなく、近代歴史研究即ち口承史研究のために新しい道を開いたと言っても過言ではない。そのために多くの時間を費やしていることは見てとれる。実際にも多くの成果が発行されているが、内モンゴルやモンゴル国ではそれらは十分共有されてはいない。口承史が彼女の率いたプロジェクトの多数を占めている。中央民族大学のサランゲルとの『オーラルヒストリー：エジネーに生きる母たちの生涯』、『青海省モンゴル族民俗文化における資料とその解釈：ナストニー・ジル・アルホーラハ・バヤルを事例に』などが挙げられる。また『二十世紀のモンゴル』、『モンゴルの二十世紀』などのプロジェクトを組織し、*Socialist devotees and dissenters：three twentieth-century Mongolian leaders*(2011)、*A herder, a trader, and a lawyer：three twentieth-century Mongolian leaders*(2012)、*Development trajectories for Mongolian women in and after transition*(2013)などの著作も出版されている。モンゴルの Lkhagvasuren やアメリカの Mary Rossabi と Morris Rossabi 等と共同でモンゴル、日本、英という三種類の言語で発行している。またその間、内モンゴル大学のナランゲレルと共同研究を行った。

また『モンゴルにおける農業開発史』(2010)などを執筆し、モンゴル国のセ・チョロンと『モンゴル国営農場資料集』(2013)を、サランゲルやソヨルマ等と『20 世紀におけるブリヤート人たち:中国内モンゴル自治区フルンボイルにおける口述史』(2014)を出版している。

上に挙げた書籍や論文を日本国立民族学博物館のホームページで載せられており無料で読める。「口承史の収集は後人の歴史研究に資料を提供できる」という言葉から彼女の研究思想が伺える。個人的にはこれが近代史研究の新しい道を指していると思う。公文書だけが歴史の唯一の根拠ではないという認識が普遍した現在、最も公文書を十分利用できない現状では口承史の収集は欠かせない。我々は思想史や革命史だけに注目するだけではなく、人民の歴史あるいは生活の史を書く必要もある。ネットワークの普及に伴い我々は多くの地域に赴き、口承史の収集できるようになった。人類学と歴史記述の対話も更に深められるだろう。

モンゴル語版出版に寄せて

ナランゲレル（内モンゴル大学外国語学院）

著者の小長谷有紀先生および訳者のテンケーさんにお慶び申し上げます。おめでとうございます。

小長谷有紀教授の勤勉と地道な学問の態度、『人類学者は草原に育つ』の学術的位置づけなどについて、すでに述べられましたので、わたしはそれ以外に、ひとつ具体的な例をあげたいです。この書のなかにも書かれているように、著者は梅棹忠夫の調査ルートをたどって、地名や寺院などを確認する調査を数回行いましたが、わたしはそのなかの一回に同行しました。北京からタイブス旗、正蘭旗、镶黄旗、正镶白旗、シリンホト市、東スニットなどを現地調査しました。そして、現地の学者や年寄りも訪ねて教えてもらったりして、ひとつひとつ確認しました。様子がすっかり変わり、元の姿がまったく想像できなくなったり、またはもう忘れられ使わなくなったりした地名などは少なからずありました。外国の学者の目で見ると、現地の出身者として気づかなかったことに気づくようになったりするのも国際学術交流の持つ重要な意味だと思います。

モンゴル民俗を遡る：日本人学者の草原への愛
―小長谷有紀教授の著作『人類学者は草原に育つ』モンゴル語版を読んだ感想

白暁梅（中央民族大学博士後期課程）

2018 年 5 月 1 日の午後 2 時に中央民族大学で、日本の紫綬褒章、モンゴル国友好勲章の授章者である著名なモンゴル学者、人類学者小長谷有紀教授の著作『人類学者は草原に育つ』のモンゴル語訳の出版記念討論会が行われた。

本著は、2014 年に日本語で出版され、2018 年 4 月にモンゴル語訳が内モンゴル文化出版社から刊行された。本著を中央民族大学のサランゲレル教授の下で在籍する大学院後期課程 2016 年期のジャライル・テンへ―(李前強)がモンゴル語に翻訳した。

１.草原で育った人類学者小長谷有紀

小長谷有紀氏は 1957 年に日本の大阪市で生まれた。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。人間文化研究機構理事、国立民族学博物館の併任教授であり、遊牧文化論、モンゴル研究を専攻する。1979 年にモンゴルへ留学して以来、日本におけるモンゴル研究の最も優れた研究者として今日まで研究を行なってきた。代表作に『モンゴル草原の生活世界』(朝日新聞社、1996 年)『モンゴルの二十世紀―社会主義を生きた人びとの証言』(中央公論新社、2004 年)等が挙げられる。2007 年にモンゴル国友好勲章、2013 年に日本の紫綬褒章をそれぞれ受賞した。

小長谷有紀氏は初めてモンゴルに足を運んでから 30 年近くなる現在は既に、若い娘から著名な学者へと変身している。彼女はこの 30 年間、モンゴル地域の変化を目で見て、心で感じ、すべての困難を乗り越えてモンゴル遊牧文化研究へ貢献してきた「英雄」と言っても過言ではない。広い知識、豊かな経験、謹厳な研究態度のほかに柔軟な思考力を持った画家のようにも思われる。自らの経験を簡潔に、生き写しできる人類学者であると同時に画家のようである。

２.『人類学者は草原に育つ』の特色

本著は 6 章 60 節からなっている。そこでは、モンゴル地域における著者の 30 年来のフィールドワークで見た、聞いた、考えた、感じたことを記述し、フィールドワークで得た快楽や経験した困難、また著者のモンゴル草原への愛情を述べている。

２−１.写実、詳細、生き生きとした自伝

全文を通して小長谷有紀教授のモンゴルとの深い絆が読み取れる。自らが経験した出来事を詳細に、生き生きとして描いているため、読者もともに旅をしたようになる。モンゴル語の勉強、モンゴルへの憧れ、様々な困難を乗り越えてモンゴルへ辿り、そこから 30 年近くモンゴルでフィールドワークを行なう過程での経験を独特に考察している。「人生は様々な初めてから成り立ち」経験した様々な初めてを他者に語るかたちでわかりやすく説明している。

『人類学者は草原に育つ』の最も心を引く特徴は「写実」な点である。著者が自らの数十年の実際の経験を記述したことで、研究の過程、研究の方法、その本人をより明確に理解できるように思われる。「産んでいけ」というタイトルが筆者の好奇心を引き、一体何が起きたかと選んで読んでみたら、誰でも経験しうる恋愛エピソードを通じて顔がよく似ているが、性格が異なる日本人とモンゴル人の相違を

面白く記述している。「ルームメイトとのけんか」に挙げられているのは日常の口論であったが、「口論」を隠せずに言う「真」が珍しい。そこで異なる自然環境、育ちによる「不和な日常」から純粋で勇気のある若さが見える。こうした日常の出来事「口論」からもモンゴル語を流暢にする必要性が生じその後の語学勉強を促した。このような意識的あるいは無意識的な経験が、今日の世界モンゴル研究舞台で輝く「小長谷有紀」を育てたのではないか。

２−２. モンゴルへの押さえられない愛情

小長谷有紀教授はモンゴルへの憧れや愛情で、若いころから現在までにモンゴル地域、モンゴル研究へ知力、労力を捧げて来た。「できるだけモンゴルの隅々へ行ってみたい。一目でも見ておきたい」というモンゴルへの好奇心、楽しみ、愛情が溢れている。

「ふるさとの名はバヤンノール『豊かな湖』」、「なつかしのウランバートル再訪」、「未来へのつながり」、「見つめない愛」、「黒板がつなぐトランスナショナル」、「届け黒板、モンゴルへ！」、「モンゴルを日本の核ゴミ捨て場にしないプロジェクト」、「若い人たちの情熱をサポートする場へ」、「未完のモンゴル研究」、「大モンゴル展」、「NPO 組織の設立」、「モンゴル国の未来を考える」などの内容に」は彼女のモンゴルへの深い愛情が浸透している。例えば、「モンゴルを日本の核ゴミ捨て場にしないプロジェクト」を読むとモンゴルで原子力が使用されないように苦労したことがわかる。こうして彼女はモンゴルのために様々なことをしてくれた。

「彼らの四半世紀後」の終わりに、著者が大阪で馬頭琴の演奏会を聞きながらウネルバヤンの息子がいつか来日して馬頭琴を弾くことを望み、その風景を想像する。まさに「子供を待つ母」のようにモンゴルとそこの人々から離れられなくなった。「なつかしのウランバートル再訪」から、1992 年になつかしのウランバートルで再訪することができた感動の気持ちが伺われる。「見つめない愛」では、モンゴルにおけるフィールドワークで、南へ渡るツルの群を眺めて、「しらんぷりするという愛し方もアリなんだろうなあ」、「しあわせは手元にとどまっている」とここのすべてに示す深い愛情を見て取れた。

本著の行間ににじみ出るのは他者の視線からではなく、モンゴルの一員としての「ホスト」の愛情である。

２−３. 困難に負けない精神

モンゴルへの留学が様々な困難あったが、それらを乗り越えて、モンゴルと強い縁を結んでいった。彼女は、困難を赤信号に例え、赤信号を渡る勇気やそこで待つ忍耐力が、読者にもヒントを与える。最も若い世代には困難に立ち向かい、乗り越える正しい態度を伝えている。初めてモンゴル行ったときは、草原を見るための冒険が「大問題」となったが、「一頭の家畜も無ければ、一張りのゲルも無いのだから」と落ち着いて交渉に臨んだ。

また収集の過程でも手続きなどで多くの困難に向き合ったといえる。ヨモギ・アレルギーをもつにも関わらず、移動の疲労に負けずフィールドワークを行なってきたことがわかる。

３.『人類学者は草原に育つ』の価値

『人類学者は草原に育つ』のモンゴル訳が出版されたことでモンゴル研究者をモンゴル読者と更に近づかせた。本著は、草原の変化を自ら経験し、草原で育った人類学者小長谷教授の、30 年に渡る研究の

過程、経験であり、またそこから生まれた感想や結果である。

３−１. モンゴル草原の絵本

本著を読むとモンゴル草原で旅をしているように思われる。全文にはモンゴルの空気や文化が反映され、そこへの愛情が浸透している。モンゴルの風景、習俗、生活などすべてを敏感に感受し記録している。モンゴル人だけでなくほかの人々でも本著を読めばモンゴルとはこうであろうと思うはずである。著者の経験と思いから生き生きしたモンゴルを読み取るための「モンゴル草原の絵本」と言っても過言ではない。

３−２. 他者の眼でのモンゴル人自分への探索

「自己」の視線では認識できないところも多々あり、「他者」の角度から見て初めて「自分身にラクダのような大きいな問題ある」のを自分で知らず、「自分自身のノミ」を人に探してもらう大切さがわかる。日本人が見て、感じたモンゴル生活をモンゴル人が読むことは鏡に顔を見ていると同じだろう。

「様々なはじめて」は同時代の人々に言わなくてもわかるだろうが、新時代の人々や外国人から見るから「ちょっと笑わされるだけでなく、なんども笑わせてもらいながら、モンゴルの二〇世紀をかいまみることができた」のではないか。

３−３. モンゴル民俗文化の手引き

『人類学者は草原に育つ』はモンゴルの絵本でまたモンゴル民俗文化を明確にわかる手引きでもある。モンゴルの人生儀礼、牧畜儀礼が「搾乳儀礼の研究へ」「去勢畜文化の研究へ」「牧畜三大儀礼の研究へ」「ふるさとの名はバヤンノール『豊かな湖』」等の節で反映されている。

例えば、「ふるさとの名はバヤンノール『豊かな湖』」ではモンゴルの養子縁組について語る。モンゴルでは養子を「ノヤン・ウル」といい、子供が子供を連れてくると考え、実子が生まれても決して養子をないがしろにはしない。またモンゴルでは末子が財産を相続し、親の面倒を見るしきたりにも触れている。「風景の断片」で新しいものをかいで品定めをする習慣を、匂いで価値や真実をみさだめるという五感で培わされた哲学であるという。

「搾乳儀礼の研究へ」での「子おとり説」や「子捕捉説」から、母畜が仔を嫌ったときに歌を歌って受け入れるようにする儀礼が思い出される。またメウシの乳搾りをする際に住み込み先の娘エルデニチメグに教わった「メウシの背中に小石を置いてしぼる、そうするとそのウシは生涯おとなしくしぼりやすくなるのだ」ということもモンゴルではよく見られる。そのほか、フィールドワークのなかで着想に至った著者自身の論文「モンゴルにおけるウマ、ウシ、ヒツジの搾乳儀礼―祝詞にもとづく再構成の試み」を紹介したのは、「初産」を祝福し家畜がどんどん増えて欲しいと願う増殖儀礼であり、家畜にとってはライフステージを画す通過儀礼でもあると見なした。

「去勢畜文化の研究へ」では家畜を生後三ヶ月くらいで去勢作業を行う。去勢作業に使用する道具、去勢の過程、それに関する儀礼―バケツに牛乳を入れる、バケツの口のまわりにところどころでゆでたキビを練って塗りつける―などを記述している。去勢や結婚式の儀礼ですべて「棒」を使う。危険を避けるために去勢の際に「祝詞」を読んでいるなどがある。著者は帰国後、「モンゴルにおける家畜の去勢とその儀礼」を執筆した。そこで去勢は家畜にとっての通過儀礼であると提示し、棒を使う習慣を、嫁

を娶るときの棒の使用と連想している。モンゴル牧畜を「去勢畜文化」と言ってもいいと見て、論文「モンゴル牧畜システムとその変容」でも事例を持って観点を述べた。

「牧畜三大儀礼の研究へ」では搾乳儀礼、去勢儀礼と共に屠畜儀礼を述べている。そこでモンゴルの屠畜の特徴は「実際には去勢オスのヒツジをふんだんに食べるにもかかわらず、老いたメスのウシで儀礼を行なうという点である」と指摘した。さらに殺しているにもかかわらず、喉に草が詰まって死んだと説明する狩猟民の心性と関連する点を述べて、屠畜儀礼は死を契機とする再生儀礼であるとの結論を出した。著者はモンゴルの牧畜三大儀礼は、それぞれ増殖サイクルの開始を契機とする通過儀礼、増殖儀礼からの離脱を契機とする通過儀礼、増殖サイクルの終了を契機とする通過儀礼であるとまとめた。家畜の増殖を願うが、去勢して乳、肉などを自由に利用できる。死んだら再生を祈願する。そのような世界観のもとに統合されているのではないかと三大儀礼の関係性を分析する。

「彼らの四半世紀後」では 20 年ぶりにウネルバヤンへ訪れ、彼の娘の結婚式で新郎だけではなく皆が赤いのを着ていることに驚いたことを語る。昔は一般的に青や水色のデールを着こなし、赤いのは殆どなかったと、モンゴル人の審美観の変化を伝えている。

３−４. フィールドワークの案内書

本著は、著者がモンゴルで 30 年近くのフィールドワークを行なうなかで、経験した現地調査の楽しいところと難しい点を記している。フィールドワークの準備、過程、方法などをこの著作から勉強できる。その上、フィールドワークの必要性、その過程の争議、どのように受け入れられたか、どのようにして結果を出せたかなども見てとれる。「『起源論』への寄与」で、フィールワークにおいて研究対象のほかにその研究の背景にあるものをも見ている。搾乳儀礼に関する考察も、搾乳以前の出産に関係する諸儀礼を視野に入れている。

「彼らの四世紀後」では著者のダンゼン父さんの子供たちの生活に関する詳細な記述や、「梅棹忠夫の内モンゴル調査資料」での梅棹忠夫の調査の道を踏襲したことも 1 つの調査の方法を提示している。

フィールドワークのスケッチ、家族宛の手紙、搾乳儀礼のスケッチなどからフィールドワークの方法と「物語れる画家」を連想させる。口承史の価値や方法をも参考できる。

３−５. 日本モンゴル間の文化交流と差異

「スーホの白い馬」という物語が日本の小学校教科書に編入されている。小長谷教授はその物語にあわせてゲルやデール、ゲームなどを関連して教えると更に効果的だと提言した。これよりも日本モンゴル間の文化交流へ貢献し、研究成果を社会に還元している。

「産んでいけ」でもモンゴルと日本の考え方、「風景の断片」でも語学勉強における日本人とモンゴル人の相違を挙げている。「なつかしのウランバートルへ再訪」でも日本人とモンゴル人の断り方の違いを述べている。

小長谷有紀教授のモンゴルにおける 30 年近くの研究と調査の経過をまとめた『人類学者が草原に育つ』のモンゴル語訳が刊行されたことで、モンゴル人も他者の視線で書かれた自分たちの社会を見る機会ともなり得た。小長谷有紀教授はモンゴル遊牧文化を研究し、そこにすべての精力を尽くし、モンゴル文化ひいては人類文化の研究に貢献している。

自分を貫こう
—小長谷有紀氏著『人類学者は草原に育つ』の読後感

高迎春（中央民族大学博士後期課程）

万緑の五月に、日本の人類学者小長谷有紀著『人類学者は草原に育つ：変貌するモンゴルとともに』のモンゴル語版が内モンゴル文化出版社から刊行された。

小長谷有紀氏は、日本におけるモンゴル研究の代表的研究者である。モンゴル文化の保護、発展、伝承に大きな貢献をしてきた。彼女はフィールドワークをもとに人類学、生態学の数多くの論文を執筆し、『モンゴルの春』、『モンゴル草原の生活世界』、『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人びとの証言』等の書籍を出版している。

『人類学者は草原に育つ: 変貌するモンゴルとともに』は、小長谷有紀氏のモンゴルでのフィールドワークをもとに執筆した四冊目の書物である。本著では、彼女がモンゴルで行ったフィールドワークを映像のように生き生きとして描いている。ここでは 1979 年にはじめてモンゴル人民共和国へ留学してから 2014 年までの自らの経験を記述している。本著は 6 章からなっているが、内容はモンゴルでのフィールドワーク、伝統モンゴル文化の保護、モンゴルのための活動という部分に分けられている。フィールドワークを通して小長谷有紀氏はモンゴルと深い絆を築いた。1980 年代の後期、内モンゴルのシリンホト市の郊外で始めてのフィールドワークをおこない、モンゴル牧畜の三大儀礼を考察した。1990 年代にグループでモンゴル国やロシアのブリヤートへ赴き、モンゴルの隅々までまわった。またその途中での疲労、苦痛などを、勇気をもって乗り越えていった。フィールドワークを通じて小長谷有紀氏が、研究成果をあげられただけでなく、モンゴル文化の価値をも認識できた。彼女は変貌するモンゴルで伝統文化が失われつつあることに気付き、国立民族学博物館で特別展示「大モンゴル展」を組織した。モンゴルで既に使われてないテント、衣服、牧畜生活の映像などを収集し、資料として保存した。小長谷有紀氏は、研究活動を行なうと同時にモンゴル人を励み、彼らを助ける方法を探った。モンゴルへ医療チームを派遣する、黒板を送る、核ゴミ捨て場となることを阻止するなど様々な活動を行ってきた。

小長谷有紀氏が内モンゴルやモンゴル国でフィールドワークを行なっていた当時は、モンゴル高原で市場経済が導入されていた。著者が内モンゴルでステイ型フィールドワークを行い、モンゴル国やトゥバでサーベイ型フィールドワークを進めるなかで、経済システムの変化によってモンゴル文化が変容していることを自ら経験したのである。著者の経験を読みながら伝統を守るか、革新を重んじるかという問いにヒントを得たように思う。

モンゴル民族は遊牧文化を以て人類の文明に彩りを添えた。遊牧文化に代々モンゴル人の経験や知恵が浸透しているのである。その多くは科学的、前進的であり、小長谷有紀氏もはじめてモンゴルでフィールドワークを行ったなか、その点を十分理解し感動した。遊牧民の困難を乗り越えるための知恵は彼らの営む遊牧生活に基づくのである。労働力を有効に使うため交替で放牧し、仔ヒツジを嫌う母ヒツジに歌を歌いその子供を受け入れるようにする。毎年生まれてくる家畜と売る家畜の頭数を調整し、牧場の利用、生活の維持、自然災害などを対応している。さらに搾乳儀礼、去勢儀礼、屠畜儀礼などにも遊牧民の生活経験から生まれた科学的な要素が含まれており、著者は学術的角度から弁証したのである。

しかしこれらの伝統が社会発展の段階で、変化し消滅されている。1990 年代の初頭、中国では市場経済の導入に伴い、経済発展が著しくなり人々の生活も徐々によくなった。遊牧民の生活が改善され、放

牧の仕方も多様化され、自動車を運転しマンションに住むようになった。また遊牧を営むと同時に、家畜の肉や乳製品の販売や観光地及び旅館を開くようになった。さらに町へ移住してレストランの運営、民族工芸品の制作や販売などをする人もいる。著者のインフォーマントであるダンゼンの次男が普段はシリンホトに暮らし、家畜には牧夫を雇っている。末子のウネルバヤンもシリンホトのマンションに住み、家畜の産期や搾乳の時期に牧地へ戻っている。

社会発展に伴って遊牧民の生活様式も多様化しており、物質的の豊かになっている。しかしその中でモンゴル人は新しいものを求めすぎて伝統文化、習俗を忘れていることは残念である。著者が二十数年後に「ふるさと」であるシリンホトの郊外へ訪れてその変化を述べている。昔は自由に往来できた両家の間で金網が張られ、個々で放牧をして家畜を統合して放牧することもなくなり、ダンザンの子供たちは町へ移住している。結婚式や年男の祝いなどは町のレストランでするようになった。

これはシリンホトの郊外だけでなく、モンゴル全体に見られる変化である。都市の賑やかのなかでモンゴルの生活の知恵、伝統文化や習俗が変化し消え去っている。現在多くのモンゴル人が都市への移住を望み、その中では表面上の安逸を求める人もいる。著者が、2014 年にオルドスで行なって調査のノートでも、昔は家畜を放牧しキビを植えていた遊牧民は、土地を売却し、高層マンション高級車を購入している現象を書き留めている。このような事例は数え切れないぐらい多い。また牧地の体力労働を避けて、安い給料でバーやレストランなどでバイトする若者たちも増えている。このような人たちは結局のところ、都市でお金を稼げないし、遊牧の知識も学べないようになるわけである。表面上はマンションに住み、快適な生活を送っているが、実際のところは祖先から伝承されてきた土地と生活の知恵を失っている。これも民族文化の変容が喪失の原因であると言える。表面上の新しい生活様式を求めた人々は伝統文化を見下して捨てている、著者はウネルバヤンの娘の結婚式のとき撮影された写真を見て驚いた。なぜなら新郎新婦を含め皆赤いデールを見につけているからである。

時代の前進とグローバル化は避けられない。モンゴル人が如何に時代の流れに乗るかを考えるべきである。

では伝承するか、改革するかと悩む必要がない。伝承と改革は矛盾しないからである。文化の伝承とは物質・精神文化を世代間に引き継ぐことである。人間が民族文化に重大な役割を果たす主体である。文化改革は伝承をもとに行われるものであり、好きなようにするものではない。近年結婚式などで笑いを取るため「ハントルマ」「ワンリ」などの民謡を下品な内容に改編している。伝承の過程でこのような現象が現れないようにしないといけない。

民族文化の伝承において時代に合わせると同時に自民族文化の特徴を重視するべきである。今日のモンゴルは意識的にあるいは無意識に多くの伝統を失っている。我々は小長谷有紀氏先生の失敗から成功へと逆転できるという精神から見習って、やるべき仕事ある。小長谷有紀氏先生はモンゴル文化の保護や保存に大きな貢献をしている。彼女は市場経済の現状で失われつつある伝統文化を保護するために様々な困難を乗り越え、モンゴルや内モンゴルで収集活動を行ない、既に使用されてないモノを博物館に保存しておいた。モンゴル人は自らの伝統文化を博物館しか見るところがなくなる日が近いかもしれない。

近年モンゴル人も伝統文化を保護するために活動しはじめ、ある程度の成果を出している。例えば、フフホトのモンゴル民族小学校がモンゴル民俗を重視し、春学期のはじめの日に教師と生徒たちがハダグを持って挨拶をしている。子供は民族の未来であり、民族文化を彼らに教えるのは何よりの贈り物で

ある。

社会は変化に富んでおり、我々はグローバルや改革に合わせると同時に自民族文化の特徴を守るべきである。

小長谷有紀著『人類学者は草原に育つ』の読後感

ソルガグ（中央民族大学博士前期課程）

小長谷有紀教授の『人類学者は草原に育つ』は学術研究書物というよりは、フィールドワークノートであろう。本著は主に小長谷有紀教授のフィールドワークを紹介している。そこで、1979 年にはじめてモンゴルを訪れて以来、2014 年までにモンゴル、内モンゴル、ロシアで行なったフィールドワークを詳細に記録している。記述の方法は簡易でわかりやすく、内容が明確に伝わっている。「先生は今度またどこへ行くのだろう」という好奇心に導かれて一息で読みたい本である。

一.「はじめてのモンゴル」を読んで小長谷有紀先生を非常に尊敬するようになった。モンゴル語を二年で合わせて二ヶ月間勉強し、「はじめてのモンゴル語を試してみたい」と留学試験を受けたことに驚いた。モンゴルは「女の子の行くところじゃない」、「民間の奨学金で留学できない」に直面してもしりごみせず、方法を考え、可能性を探った。私は小学校五年から英語を勉強してきたが、現在から海外へ留学するとなると、語学には自信がない。同じく女性である自分は先生のそのような勇気を尊敬する。

二.『人類学者は草原に育つ』の価値は、フィールドワークの報告としてだけではなく、小長谷先生の人類学者としての視線でモンゴル生活を考察し、その上で理論家した点でもある。具体的に言うと、例えば「牧畜三大儀礼の研究へ」では、「搾乳、去勢、屠畜」をモンゴル牧畜の三大儀礼として見なしている。そこで、「搾乳儀礼は、家畜にとってライフステージを画する通過儀礼であり、去勢は増殖サイクルから切り離される作業であり、可処分所得になることを意味し、オス家畜の通過儀礼である。屠畜儀礼は死を契機とする再生儀礼であり、増殖サイクルの終了に契機とする通過儀礼である」と指摘している。また「家畜は人が管理している動物であるが、種付けは家畜の自由な性的活動にゆだねられてきた。産む家畜になったときに祝い、増殖するよう期待するが、それはあくまでも期待にとどまる。生まれた子畜が少し大きくなったとき、オスの大半は増殖サイクルから切り離される。これにより、人が自由に利用しうる世界すなわち去勢畜文化が確立する。言い換えれば、それ以外の利用は自然界からの借用にとどまる。乳の利用はあくまでもメス畜からの拝借なのである。そしてさんざん拝借していた相手が死ぬと、再生を祈願する。増殖するよう期待するが、あくまでも期待にとどまる。そのような世界観のもとに統合されているのではないかと私は考えている。」と結ぶ。

先生の分析が適切であると私は思う。私は「搾乳、去勢、屠畜」をよくわかっているが、しかしそれは家畜のライフステージにとって通過儀礼であることは考えたことがなかった。表面上のことだけわかっていたのである。「先生のいうとおりだ」と痛感すると同時に、研究者であるからこそできる鋭い考察力だと思う。

三.本著を読むことでフィールドワークの基本方法、種類、調査計画と資金申請などについて理解を持てた。最初は、フィールドワークとは研究者がある地に行き、あるテーマの周辺でインタビューをすることであると考えていた。本著を読むことでフィールドワークとは「じっくり滞在し、ゆっくり生活をともにして、フィールドワークをおこなう。その過程で集めた資料と自らの体験をもとに研究成果を発表していくこと」であるとわかった。またフィールドワークには「ステイ型フィールドワーク」と「サーベイ型フィールドワーク」と二種類があることも理解できた。

フィールドワークは具体的な計画のもとでおこなわれるものである。そこでまずは科研を申請する必

要があり、申請書を簡潔に書けるかどうかが重要となることは、「資金の調達」を読むことでわかった。先生の記述したフィールドワークの基本方法と研究費申請の方法も我々若手にとって非常に参考となる。四.人の助けになるよう心がけてきた小長谷有紀の人格に魅了される、先生は研究者として調査を終えたら帰ったのではなく、ここで育てた人間として、モンゴルのために何かできたらと頑張ってきた。例えば、2000 年に「モンゴルパートナーシップＮＰＯ」を立て、モンゴル人と共にモンゴル国の未来を考えた。1999-2001 の雪害にはモンゴル国の「オドリーン・ソニン」で文章を揚げてモンゴル人を励めた。モンゴルが日本の核ゴミの捨て場にならないように力を尽くした。「黒板プロジェクト」を組織し、2007 年から 2014 まで 1500 枚の黒板をモンゴルへ送り、両国の交流に貢献してきた。

他の研究者も小長谷有紀先生と同じく調査地のことを心配してそこの人たちのために努力しているか否かはわからない。しかし、小長谷先生のその自分だけのためではなく他人の役に立とうとする精神を見習いたい。

最後に、著者の小長谷有紀先生とモンゴル語へ翻訳したジャライル・テンヘーに感謝を述べたい。